

陽夏の謝氏

はじめに

四世紀初頭、江南に成立した東晋（三一七—四二〇）は、皇帝権力のはなはだ脆弱な王朝であつた。東晋は、短期間ながら中国全土を統一した司馬氏の西晋王朝が、内乱と北方異民族の侵入によつて滅亡した後、南下した貴族階層が、司馬氏の一族司馬睿（しばえい）をもりたてて樹立した亡命政権だつた。このため成立当初から、東晋では、琅邪（山東省臨沂県）を原籍地とする「琅邪の王氏」と、陽夏（河南省太康県）を原籍地とする「陽夏の謝氏」を筆頭に、貴族階層が政権の中枢を占めつづけた。東晋の命脈をにぎる二大貴族、「琅邪の王氏」と「陽夏の謝氏」は、首都建康（江蘇省南京市）の一角、烏衣巷（いさうきやう）に豪華な邸宅をかまえ、盛りのときを謳歌した。唐代の詩人劉禹錫（りゅうしやく）は七言絶句「烏衣巷」において、それから数百年後の烏衣

巷の情景をこう歌っている。

井 波 律 子

朱雀橋辺野草花 朱雀橋辺 野草の花
烏衣巷口夕陽斜 烏衣巷口 夕陽斜めなり
旧時王謝堂前燕 旧時 王・謝 堂前の燕
飛入尋常百姓家 飛んで尋常百姓（ひやくぐわい）の家に入る
（朱雀橋のたもとには、野の花が咲き乱れ、烏衣巷の入り口には夕陽が斜めにさしこんでいる。その昔、王氏や謝氏の邸宅の正堂の軒下に巢を作っていた燕は、今やありふれた庶民の家の軒に飛び入っている。）

さしもの栄華を誇つた琅邪の王氏や陽夏の謝氏も時間の推移とともにあとかたもなく滅び去り、今はただ蕭条たる残影が残されている。

るだけ。この詩は東晋の二大貴族の没落、消滅のさまを鮮やかに寸描したものといえよう。

もつとも、ここで「王・謝」と並称されているものの、魏以来の名門貴族「琅邪の王氏」に比べれば、「陽夏の謝氏」ははるかに後発の新興貴族であった。謝氏一族のなかで、最初に頭角をあらわしたのは謝鯤（生没年不詳）である。

謝鯤

謝鯤の父、謝衡はものごたい儒学者であり、西晋の国子祭酒（国立大学にあたる国子学の学長）だった。しかし、謝鯤は父とは対照的に道家老荘思想を好み、若いころから不羈奔放、奇行の主として知られた。たとえば、あるとき、隣家の美しい娘に戯れかかったところ、怒った娘に梭（はた織りの道具）を投げつけられ、齒が折れてしまった。世間の者が面白がり、「任達（自由奔放）やまずして、幼輿（謝鯤のあざな）齒を折る」と嘲したてた。すると、謝鯤は「それでもわしが口笛を吹くのはとめられない」と、齒のない口をすぼめて口笛を吹いたという。なんとも能天気な話である。ちなみに、謝鯤はけつきよくこの勝気な隣家の美少女（高氏）と結婚したという説もあるが、確証はない。

やがて謝鯤は弟の謝裒をはじめ一家眷属ともども、西晋の王族の血肉間抗争「八王の乱」につづき、北方異民族の侵入による「永嘉

の乱」で、大混乱に陥った華北を離れて南下、豫章（江西省）に移り住む。このころ、「琅邪の王氏」のリーダー王導（二六七—三三九）とその従兄の王敦（二六六—三三四）は、西晋王朝の一族司馬睿を輔佐し、すでに着々と江南の司馬政權の基盤作りを進めていた。軍事に長けた王敦は永嘉六年（三二二）、江州刺史となり、広武將軍から左將軍になった。この時点で、謝鯤は王敦に招聘され、長史（僚属長）になっている。謝鯤は西晋末の貴族社会を風靡した清談（哲学談議）の名手であり、王敦はその名声に利用価値があると考えたのである。その実、謝鯤は浮世離れのしたポーズとはうらはらに、レベルの高い政治的センスおよび軍事的能力の持ち主だった。長史になった翌年、蜀を拠点とする杜弢が反乱をおこしたさい、王敦に従って征伐にあたり、早々と戦功をあげたところにも、その片鱗がうかがえる。ともあれ謝鯤の江南生活は、こうして王敦の傘下に加わることによって始まったわけだが、彼は、強引で権力欲のつよい王敦に危険なものを感じ、慎重に距離をとりつづけた。

建興四年（三一六）、北方異民族の猛攻にさらされながら、辛うじて命脈を保っていた西晋がついに滅亡、翌年、司馬睿が即位（元帝）、江南に東晋王朝が成立する。この直後から、東晋創業の元勳たる王敦は荊州刺史として、長江中流域の軍事拠点武昌（湖北省武漢市）に依拠、強大な軍勢力をバックに、司馬氏に取って代わろうとする野望を日増しに膨らませるようになる。いくら諫めても耳を

貸さない王敦に手を焼いた謝鯤は、友人ともども「竹林七賢」をまねて奇行を誇示し、いっさい政治に関わらないという姿勢を示す。このとき謝鯤とともに、素裸になり髪をふり乱して飲酒にふけった友人は、胡母輔之、畢卓、阮放、羊曼、桓彝、阮孚、光逸の面々である。彼ら八人は当時（東晋初期）、「八達」とよばれ、粹にはまらない生き方を好んだ東晋の貴族社会の注目的となった。

永昌元年（三二二）、ついに王敦は「君側の奸」の打倒を旗印に挙兵、首都建康まで攻め寄せた。このとき、王敦は名声の高い謝鯤を強制的に同行した。謝鯤は、朝廷などあつてなきがごとし、權威をみせつけようとする王敦を、手を変え品を変えてなだめようとしたが、頭に血がのぼった王敦はまったく受け付けようとしなかった。ついに王敦が自分に同調しない、東晋の重臣周顗と戴若思を殺害したとき、さすがに剛毅な謝鯤も、周顗と親しかったこともあり、果然自失となった。この後も謝鯤は王敦を諫めつづけて不興を買い、まもなく豫章太守として地方に出されたのだった。

豫章郡に赴任した謝鯤は行政手腕を発揮して善政をしき、住民に慕われたが、まもなく死去するにいたる。ときに四十三歳。太寧二年（三二四）、王敦が東晋軍と対戦中、無念の病死を遂げる直前だったとおぼしい。

成立まもない東晋王朝を根こそぎ揺さぶった「王敦の乱」は、王敦の死によって終息し、傾きかけた東晋はかろうじて立ち直ること

ができた。王敦の従弟の王導は、この反乱の渦中でも、少なくとも表面的にけつして王敦と同調せず、あくまでも従兄の不始末を陳謝するポーズをとりつづけた。このため、その後も王導は東晋政權のトップの座を占めつづけるのである。一人が朝廷に反乱し、一人が朝廷の護持にまわる。どちらに転んでも家門は存続するわけだ。いかにも魏晋の乱世をくぐりぬけてきた名門貴族「琅邪の王氏」らしい、したたかな処世だといえよう。

謝鯤の率いる「陽夏の謝氏」は、この時点ではまだ「琅邪の王氏」の足元にもおよばない中流貴族にすぎない。しかし、謝鯤は思い切り派手なパフォーマンスで東晋貴族社会の耳目をひきつけたうえで、王敦の配下でありながら安易に同調せず、気骨のあるところを示して、ますます評判をあげた。どうして謝鯤も只者ではない。この謝鯤の活躍を機に、「陽夏の謝氏」は王敦の乱以後、じりじりと上昇気流に乗るのである。

謝尚

謝鯤の没後、「陽夏の謝氏」のホープとして脚光を浴びたのは、謝鯤の長男謝尚（三〇八―三五七）である。謝鯤が病死したとき、謝尚はまだ十代の少年だったが、群を抜いた聡明さで早くも有名であった。天才少年としてもてはやされ、得意の絶頂にあったころ、謝尚は派手な衣装を身につけ闊歩するなど、目にあまる振舞いも多

かった。見かねた叔父（謝鯤の弟謝裒）らがきつく注意すると、謝尚は即座に恥じ入って身持ちを改め、以後、ますます当時の名士の注目を集めるようになった。

とりわけ、当時、司徒（最高位の三人の大臣の一人）だった王導は彼を竹林七賢の一人、王戎（おうじゆう）になぞらえて「小安豊（安豊は王戎のあざな）」と呼び、その将来を嘱望して召し寄せ、みずからの掾（えん）（属官）とした。謝尚がはじめて司徒の役所にやってきたとき、おりしも宴会の最中だった。謝尚に音楽的才能があることを知っていた王導が「鵲（く）舞」を披露するよう求めると、謝尚は即座に着替え、宴席に連なった一同の手拍子に合わせて、さっそうと舞いつづけたという。謝鯤も歌や琴が得意だったから、彼の音楽的才能は父譲りだったのだろう。

こうした格好のよさと合わせ、謝尚には並々ならぬ軍事的才能があり、射撃も得意中の得意だった。王導の掾を皮切りに、昇進を重ねた謝尚はやがて地方に転出して郡の長官となり、歴陽太守から江夏（しやう）の相（さう）となる。江夏の相だったころ、荊州刺史として近接する武昌に鎮（ちん）していた庾翼（よ）と親しく往来し、いっしょに射撃を楽しんだりした。あるとき、庾翼が、「きみが的に命中させたら、鼓吹隊を褒美にやろう」といったところ、謝尚はその声に応じて発射し、みごと命中させたという。これは、庾翼が武昌に鎮（ちん）していたころの話だから、咸康六年（三四〇）から八年（三四二）にかけてのことだろう。

このとき謝尚は三十台の前半である。

ちなみに、庾翼は一時期、王導をしのぐ勢力を誇った庾亮（よりよう）の弟にあたる。東晋王朝は、「王敦の乱」が終息した三年後、ふたたび動乱の渦中に巻きこまれた。咸和二年（三二七）、王敦の乱平定に功績のあった北来（きた）の軍団長（華北からの避難民がまとまってできた）がった武力集団のリーダー）蘇峻（そしゅん）が、夭折（えうせつ）した東晋第二代皇帝の明帝（三二一—三三五）に代わって即位した幼い成帝（三二五—三四二在位）の叔父で、当時、勢いをふるった庾亮に対する憤懣（ふんまん）を爆発させ、とつじよ挙兵したのである。暴徒と化した蘇峻の軍勢は都建康に進入するや、大々的に放火や略奪をはたらくなど、手のつけられないありさまだった。

この蘇峻の乱は、咸和四年（三二九）、京口（江蘇省鎮江市）を拠点とし、長江下流域を準備するいわゆる「北府軍団」のリーダー郗（け）鑒（かん）と、王敦に代わって荊州刺史となり、武昌を拠点に長江中流域を準備する「西府軍団」のリーダー陶侃（とうかん）（陶淵明の曾祖父）が協力して、ようやく鎮圧されたのだった。東晋はこの後、中央行政を担当する王導と、この郗鑒、陶侃の三巨頭によるトロイカ体制で、ようやく安定するにいたる。

付言すれば、首都建康の近くに拠点を置く北府軍団は、郗鑒以後も東晋王朝の忠実な守護軍として機能したのに対し、建康から距離のある西府軍団は王敦、さらには陶侃以後も、ときには東晋王朝に

叛旗をひるがえすことも辞さない、半自立的な軍閥として機能しつづける。

蘇峻の乱の引き金となった庾亮は、責任を感じて中央を離れ、豫州刺史を経て、咸和九年（三三四）、陶侃の死後、後任の荊州刺史となり西府軍団を掌握、咸康六年（三四〇）、死去した。庾亮の死後、弟の庾翼が後任となり、先にあげたように謝尚と往来したというわけだ。庾翼と謝尚はほぼ同世代であり、王敦の乱や蘇峻の乱とも直接、かかわりのない東晋第二世代にほかならない。ちなみに、二度にわたる内乱をとにかくにも抑え、東晋に平穩をもたらした三巨頭のうち、先述のとおり、咸和九年（三三四）に陶侃が死去し、その五年後の咸康五年（三三九）、郗鑒と王導も死去した。庾翼と謝尚が往来し射撃を楽しんだころには、第一世代の巨頭は誰もいなかったのである。

さて謝尚である。謝尚は個人的武勇にすぐれるのみならず、行政官としても軍隊指揮官としても、非常に有能であった。たとえば、郡長官として着任したとき、郡役所で四十四の布を使って幔幕を作り、新任の長官を歓迎したところ、謝尚はさっさとこの幔幕を裁断させ、兵隊の下着にしてしまった。実利的にして、人情の機微を知り尽くした心憎いやりかたといえよう。

こうした有能さが高く評価され、永和元年（三四五）、謝尚は豫州刺史に昇進し、まず歴陽（安徽省和県）、ついで蕪湖（^{かこ}同当塗県）

を根拠地とする。ちなみに、謝尚が豫州刺史になる直前、親しかった庾翼が死去し、桓温（^{かんおん}三二一—三七三）が後任の荊州刺史となり、西府軍団を掌握している。桓温は、謝尚の父謝鯤とともに「八達」に名を連ねた桓彝の息子だが、第二代皇帝の明帝の娘、南康長公主と結婚したのを機にのしあがり、ついに荊州刺史となつて念願の強力な軍事力を手中におさめたのである。これ以後、約三十年にわたつて、桓温はじりじりと勢力を拡大し、虎視眈々と東晋王朝簒奪を狙いつづける。

そんな桓温の陣取る武昌と首都建康の中間に位置する豫州を支配した謝尚の役割にも、はなはだ微妙なものがあつた。しかし、謝尚は内部問題はさておき、肝心なのは外敵だと言わんばかりに、華北を支配した北方異民族とわたりあい、奮闘しつづけた。豫州刺史となつた三年後には、北上して国境の寿春（安徽省寿県）に進駐、氏族の前秦のリーダー、苻健の軍勢と苦しい戦いをつづけるが、この苦闘のなかで、西晋王朝が滅亡したさい、華北で紛失した璽（天子の印）を取りもどすという、予期せぬ幸運にも恵まれた。かくして、升平元年（三五七）五十歳で、歴陽の鎮で死去するまで、彼はつごう十三年、豫州刺史として、華北との最前線を守りつづけたのだつた。

謝尚は行政面でも軍事面でも傑出した才能を有すると同時に、当時の貴族社会で歓迎される人格、教養、風貌を兼ね備えていた。こ

のため、父の友人で「八達」のメンバーだった阮孚（竹林七賢の一人、阮咸の息子）から、「心が澄みきつてのびのびしており、自由奔放の境地にあるように見える」（『世説新語』賞誉篇）と称賛されたり、かつて王敦の側室であり、のちに謝尚に仕えた女性から、「王敦なぞ殿さまに比べれば、田舎紳士にすぎません」（同、容止篇）と、その美貌と風格を絶賛されたこともあった。「陽夏の謝氏」のステータスは、この文武両道、東晋のために奮闘しつつ、東晋貴族社会の称賛的であった、颯爽たる謝尚の存在によって、いっきよに高まったというべきであろう。

謝安

謝尚には兄弟がなく、息子もなかったが、叔父の謝裒には息子が六人あった。そこで、謝尚の死後、六人の従弟のうち、もつとも年長の謝裒の長男、謝奕が後任の豫州刺史になったが、一年たらずで病死してしまう。謝奕は謝鯤ばりの奇人だったが、かの野心家の桓温と親しかったため、司馬（幕僚）に起用されたこともあった。司馬になった後も、謝奕の度はずれの飲酒癖はやまず、桓温夫人（明帝の娘）から「狂司馬（フーテン司馬）」と呼ばれるほどだった。おそらく、そんな不摂生のツケがまわり、早死にしたのであろう。しかし、このフーテン司馬の子女はとびきり優秀だった。伝統中国きつての才女謝道韞、「肥水の戦い」で前秦を撃破した謝玄（三四三

―三八八）がこれにあたる（後述）。

升平二年（三五八）、謝奕の死後、弟の謝万（謝裒の四男）が後任の豫州刺史となる。この時点において、謝尚の功績に鑑み、豫州刺史のポストは「陽夏の謝氏」の持分になっていたとおぼしい。ところが、この謝万が大失態を演じ、謝尚が積み上げた成果を無にする羽目になる。そもそも、着任早々、傲慢な謝万は軍の幹部を兵卒呼ばわりして憤激を買ってしまう。このときは、傲慢無礼な弟を案じて任地の歴陽までついて来た、兄の謝安（謝裒の三男。三二〇―三八五）が隊長以下、一人一人、幹部のもとを訪れ鄭重に詫言を入れて、ようやく事なきを得た。ちなみに、謝安はこのときまだ出仕していなかった。

着任の翌年、升平三年（三五九）、謝万は決定的な大失敗をする。この三年前、桓温はみずからの威力を誇示するために北伐を敢行、幸運に恵まれて西晋の旧都洛陽を奪還する殊勲をあげた。奪還したとはいえ、これは桓温にとってあくまでパフォーマンスにすぎず、少数の守備軍を残して、彼自身は主力の軍勢を率いてさっさと帰還してしまう。つまるところ、北方異民族の国々に挟まれた洛陽がまた奪い返されるのは時間の問題だった。案の定、升平三年、洛陽は氏族の前秦と鮮卑族の前燕の軍勢に挟み撃ちにされた。

謝万はこの救援のために軍勢を率いて歴陽から出撃したものの、あえなく大敗北を喫した。この結果、責任をとわれて失脚、官位を

剝奪され、庶人に貶されてしまう。兄の謝安が気ままな隠遁生活に終止符をうち、官界に出馬したのは、この翌年（升平四年）のことだった。兄の謝奕が死に、弟の謝万が大失敗して、雲行きの怪しくなった陽夏の謝氏のために、重い腰をあげざるをえなかったのである。

謝安は若いころから逸材と評判が高かったが、頑として出仕せず、風光明媚な会稽かいけいの東山とうざん（浙江省上虞県の西南にある山）に隠棲していた。隠棲とはいえ、遊覧に出かけるときは必ず妓女を伴ったというから、なかなか艶っぽい暮らしだった。それかあらぬか、賢夫人だった謝安の妻は、あるとき、うすい帳とばりで仕切った舞台で、侍女たちに歌舞を演じさせたが、謝安にちよつと見せるとすぐ帳をさげてしまった。謝安がもう少し見たいとせがむと、夫人は「ご人徳を傷つけるといけませんから」と、ぴしりとはねつけたという話もある（『世説新語』賢媛篇）。

この謝安夫人は齒に衣きせぬ女性であり、謝安のもとに軽佻浮薄な友人が訪れ、なれなれしい口のききかたをしたとき、あきれ果てた口調で、「亡くなった兄のところにあんなお客はありませんでした」と言い捨て、謝安を恥じ入らせたという話もある（同、輕詆篇）。夫人の実家の劉氏は、新興貴族の謝氏とは段違いにランクの高い、後漢以来の名門貴族であり、兄の劉惔りゅうたんは東晋きつての名士

だったのである。新興の謝氏一族が、総じてたぶんに粗野な面を残していたことを伝えるエピソードはほかにある。

いつの話か不明ながら、かの謝万が来客中に立ち上がって、あろうことか兄（謝安）の前まで行って便器をさがそうとした。すると、その客（阮裕げんよ）が「成り上がり者は人情は厚いが礼儀を知らない」と、きめつけたというものである。この痛烈なセリフを吐いた阮裕もまた、後漢以来の名門貴族の出身であった。古い伝統を誇る名門貴族からこうして軽侮されたものの、新興貴族謝氏には彼らにはない生きのよさ、奔放さがあり、謝尚亡き後、いやおうなしに陽夏の謝氏の総帥になった謝安もまた、人の意表をつくユニークな発想と恐るべき度胸のよさの持ち主だった。

謝安が隠棲していた会稽には当時、美しい景色にひかれ、大勢の名士が集まっていた。王導の従子おひで書の名手だった王羲之おうぎし（三〇七—三六五）も、永和七年（三五二）、まず会稽の長官として赴任、その四年後には完全に官界から身を引き、この地に隠棲した。謝安と王羲之は親しく往来し、そんなことから王羲之の二男王凝之おうぎしと謝安の姪の謝道韞（謝奕の娘）の縁談もまとまった。これによって、琅邪の王氏と陽夏の謝氏は姻戚となったわけだ。ただ、王凝之は書の腕前こそ父譲りでなかなかのものだったが、はなはだ間の抜けた頼りない人物で、頭の切れる謝道韞は里帰りするたびに、叔父の謝安に向かって、「この世に王郎きんみたいな人がいるとは、思いもよら

なかったわ」と、こぼすことしきりだった。

それにしても、謝安は宮仕えもせず、一族郎党を引き連れて長らく会稽に隠棲し、妓女を伴って物見遊山に明け暮れるなど、文字どおり悠々自適の日々を送った。これは、新興貴族とはいえ、謝氏一族にすでに確たる経済基盤があったことを示しており、会稽には彼らの莊園もあったとおぼしい。謝氏と会稽の地縁は謝安以後も代々受け継がれ、建康の屋敷のほか東山の別邸もずっと維持されてゆくのである。

謝安は弟の謝万が失脚した翌年の升平四年（三六〇）、ついに会稽における優雅な隠遁生活に終止符を打ち、官界に出馬した。ときに四十一歳。謝安の出馬は、陽夏の謝氏のリーダーとして、みずから乗り出さねばならなかった個人的事情と、桓温の威勢が日増しにつる状況のもとで、世評の高い謝安を対抗馬に立てようとする東晋王朝の思惑が、奇妙に合致した絶好のタイミングでなされたものであった。ちなみに、のちに第八代皇帝簡文帝となった司馬昱（初代皇帝元帝の末子）が、「安石（謝安のあざな）はきつと出馬する。人と楽しみをともにする以上は（妓女を伴い物見遊山にふけっていることを指す）、人と憂いをもとにしないわけにはゆくまい」と期待をこめて予言するなど、謝安の出馬を待望する気運はこのころ盛り上がる一方だったのである。

官界に乗り出した謝安の初任官は、なんと未来のライバル桓温の

司馬であった。兄の謝奕の縁もあり、その意味ではけっして唐突な選択ではないが、それにしてもまず相手の手の内を探ろうとする、なんとも大胆不敵なやり口である。もともと、謝安を自分の司馬にと要請したのは桓温のほうであり、謝安のほうはこの見くびったやり方を逆用したのだから、ますますもって食えない人物である。

桓温の司馬をふりだしに、以後、謝安は呉興郡（浙江省）の長官をつとめて功績をあげたのち、中央の要職を歴任し、しだいに重みを増してゆく。この間も、桓温の膨張ぶりはとどまるところを知らず、大司馬（三公の上の位）に昇進、太和四年（三六九）には、荊州を拠点とする西府軍団にあわせて、郗鑒に始まる京口を拠点とする朝廷守備軍たる北府軍団をも手中に収める。この時点で、東晋王朝は死に体になったといっても過言ではないほどだ。

こうして着々と布石を打った桓温は、かねて念願の東晋王朝篡奪計画を実現すべく、咸安元年（三七二）、第七代皇帝の廃帝司馬奕を退位させ、傀儡皇帝として簡文帝司馬昱を立てる。機が熟せば、簡文帝から禅譲を受けるもくろみだったのである。ところが、簡文帝もさるもの、事はそううまく運ばなかった。簡文帝は即位と同時に、桓温に対する防波堤として謝安と王坦之（琅邪の王氏とは別系統の名門貴族「太原の王氏」に属する）を侍中（皇帝の顧問）に任用し、周到に対策を練ったのである。かくして即位の翌年、簡文帝は死去したが、臨終にあたり後継者として幼い三男の孝武帝司馬曜

（三七二—三九六在位）を指名し、桓温にその輔佐を命じた。当然、自分に帝位が譲られるものと思っていた桓温は激怒し、謝安と王坦之が陰で画策したのではないかと疑い（その可能性は大いにある）、彼らを殺害しようと決意する。この事件ははなはだ有名であり、『世説新語』雅量篇に収められたエピソードには、次のように描かれている。

桓公（桓温）は武装兵をしのばせて宴会をもよおし、広く朝臣を招待して、その機会に謝安と王坦之を殺してしまおうとした。王坦之ははなはだうろたえ、謝安にたずねた。「いったいどうしたものだろう」。謝安は顔色も変えずに、文度（王坦之のあざな）に言った。「東晋王朝の存亡は、われらの行動ひとつにかかっているのだ」。

二人そろって（桓温の前に）進み出ると、王坦之の恐怖のありさまはますます表情にあらわれ、謝安のゆったりとした落ち着きぶりはいよいよ顔にあらわれた。階段をめぎして席に進んだちようどその時、（謝安は）「洛下書生詠」をうなり、「浩浩たる洪いなる流れ」の詩をうたった。桓温はその氣宇壮大さをはばかり、そこでさっそく武装解除させた。

王坦之と謝安はそれまで名声が等しかったが、このことではじめて優劣がついた。

「洛下書生詠」は鼻にかかったただみ声で歌うのが習いであり、鼻疾のあった謝安はこれが得意だったとされる。桓温は謝安のこの一世一代の大芝居に圧倒され、千載一遇の機会を逃してしまう。桓温もまた武力一点張りの軍人ではなく、東晋貴族社会の一員でもあったため、謝安が仕掛けた心理作戦の土俵に引きずり込まれ、完敗したのである。

こうして土俵際でふみとどまり逆襲をかけた謝安のおかげで、死に体の東晋王朝は奇跡的に息をふきかえた。一方、桓温はこれがケチのつきはじめ、この事件の翌年の寧康元年（三七三）、篡奪を目前にしながら、無念の病死を遂げる。

約三十年にわたり東晋王朝を揺さぶった桓温の死後、謝安がトップの座につき、政權を担当した。彼は東晋初期の王導に似たタイプ政治家であり、緊張の激化を避け、各勢力との融和をはかることを旨とした。この謝安の穏やかな手法が功を奏し、東晋王朝はしばし安定を取りもどす。これは同時に陽夏の謝氏の絶頂期でもあった。今や、謝氏一族は琅邪の王氏にひけをとらない東晋きつての大貴族となったのである。

謝氏の栄光をさらに輝かせたのは、太元八年（三八三）、謝安の従子謝玄が叔父の謝石（謝安の弟、謝哀の五男）とともに、わずか八千の東晋精銳軍を率いて、華北を統一した前秦の百万にのぼる大

軍をこてんぱんに撃破し、予期せぬ大勝利をあげたことである。この「肥水の戦い」の勝利により、東晋は北方異民族の脅威から解放されたのだった。

謝尚に見られたように、陽夏の謝氏には軍事的才能の血統があり、謝玄はこれをみごとに受け継いだといえよう。付言すれば、謝玄は肥水の戦いの六年前、太元二年（三七七）に謝安の推薦で兗州刺史に就任、すでに北府軍団のリーダーとなっている。行政の謝安、軍事の謝玄の二人三脚は、肥水の戦いの勝利によって、ますます強固なものとなったのはいうまでもない。

しかし、この二年後の太元十年（三八五）、謝安が六十六歳で死去した直後から、またも暗雲がただよいはじめる。謝安の死後、実権をにぎったのは、孝武帝の弟司馬道子^{しばどうし}である。司馬道子は取り巻きとともにやりたい放題、その腐敗ぶりには筆舌に尽くしがたいものがあり、みるみるうちに混乱が深まる。こうした状況のもと、謝玄は体調がすぐれなかったせいもあり、謝安の死の二年後、太元十二年（三八七）、みずから申し出て、兗州および徐州刺史を辞任、北府軍団リーダーの地位を下りて、謝氏の根拠地会稽の長官に転任した。この翌年、謝玄は会稽で病没しているから、実際に体もわるかったのだろうが、司馬道子の専横ぶりにすっかり嫌気がさしたものと見える。

こうして豪胆な謝安につづき、武勲赫赫たる謝玄も退場した後、

東晋王朝の屋台骨は傾く一方となる。

その後の陽夏の謝氏

東晋王朝の衰退は、太元二十一年（三九六）、孝武帝が変死し、その長男で暗愚そのものの安帝が即位するや、ますますひどくなる。かくて、隆安元年（三九七）および二年にかけ、北府軍団のリーダーとなった王恭^{おうきやう}（太原の王氏）は、司馬道子一派の専横ぶりに業を煮やして二度にわたって挙兵する。このとき、西府軍団のリーダー殷仲堪^{いんちゆうかん}と桓温の息子桓玄^{かんげん}（三六九―四〇四）もこれに呼応し兵を挙げたが、王恭は部下の裏切りで敗死してしまう。まもなく（隆安三年）、桓玄は殷仲堪を滅ぼして西府軍団を掌握、父桓温の果たせなかった東晋篡奪に向けて大きく一歩踏み出す。

こうして東晋王朝の内部崩壊の兆しが顕著となったころ、道教の一派五斗米道^{ごとうまいどう}を奉ずる孫恩^{そんおん}を領袖とする「孫恩の乱」が勃発、またくまに困窮した民衆の支持を得て、東晋の東南部を席捲した。陽夏の謝氏のなかにも、孫恩の乱に巻きこまれ命を落とした者が少なくなかった。しかし、あっぱれだったのは、かの謝安の姪の聡明な謝道韞である。彼女は当時、会稽の長官だった夫の王凝之とともに会稽に在住していた。孫恩軍の攻撃を受け、夫も息子も殺害されたものの、彼女はみずから刀をふるって、屋敷に攻め寄せた反乱軍と堂々と渡り合い、その氣迫に圧倒された孫恩は手を下すことができ

なかったという。毅然たる謝道韞はその後、謝氏一族にゆかりの深い会稽の地で、人々に敬愛されながら平穩な老後を送ったのだった。

四年にわたった孫恩の乱は、元興元年（四〇二）、ようやく平定された。この間、荊州で成り行きをうかがっていた桓玄は、討伐軍を差し向けようとする東晋政権の先手を打ち、すばやく長江を攻めくぐって、首都建康を制圧、諸悪の根源たる司馬道子父子、および王恭を裏切って北府軍団を支配した劉牢之を殺害した。翌年、桓玄は安帝を退位させ、みづから即位する。父桓温がほぼ三十年かかって果たせなかった夢を、息子の桓玄は末期的な時代状況のなかで、またたくまに実現したのである。

しかし、桓玄の天下はわずか百日しかつづかなかった。孫恩の乱平定に功績のあった北府軍団の中堅將校、劉裕（三五六—四二二）を中心とするクーデタによって建康を追われ殺害されたのである。この貴族社会とは根っから無縁な叩き上げの軍人、劉裕がしだいに勢力をつよめ、東晋の命運をにぎる実力者となつてゆく。彼は十七年にわたる周到な準備期間を経て、永初元年（四二〇）、ついに東晋を滅ぼして即位（武帝）、宋（劉宋）王朝（四二〇—四七九）を立てる。

東晋末から劉宋にかけて、陽夏の謝氏のうち、もっとも目立った存在は、謝玄の孫謝靈運（三八五—四三三）である。謝靈運は繊細な美意識によって、陰影に富む自然の美を歌い、「山水詩」のジャ

ナルを確立した六朝きつての大詩人にほかならない。粗野な新興貴族陽夏の謝氏も代をへて、ついに華麗にして繊細な作風の大詩人を生むにいたったというわけだ。もっとも、謝靈運は政治的センスに欠けるところがあり、けつきよく反乱罪にとわれて逮捕・処刑され、非業の最期を遂げた。謝靈運の死から約三十年後に生をうけ、清新な作風で知られる齊の詩人、謝朓（四六四—四九九）も陽夏の謝氏（高祖父が謝安の弟）であり、謝靈運が「大謝」と呼ばれるのに対し、「小謝」と呼ばれる。ちなみに、この小謝たる謝朓もまた事件に巻きこまれ、獄死している。

漢民族の南朝は東晋滅亡後、劉宋から齊（四七九—五〇二）、さらには梁（五〇二—五五七）、陳（五五七—五八九）へと、短い周期で王朝交替を繰り返した。この間、陽夏の謝氏には権力中枢と密着し、またときには排除されながら、めんめんとその命脈を保ちつづけた。政争の渦中で、謝靈運や謝朓のように非業の最期を遂げた者も数多いが、それでも、大貴族の末裔たちはしぶとく生きつづけ、家門を保ちつづけたのである。

陽夏の謝氏の完全な落日は、南朝最後の王朝陳の滅亡とともにやつてきた。開皇元年（五八九）、陳が北朝隋の初代皇帝文帝によって滅ぼされたとき、わずかに生き残った陽夏の謝氏の末裔も絶滅したのである。東晋の成立から数えて二七二年、陽夏の謝氏はまさに南朝と運命をともにしたといえよう。